

纏を取るとぼつ／＼いきを立てゝるのも見受けるが彼様なのは感胃に取つては頗る危険千萬である大人小兒を問はず暖い所から寒い所に急に變ずる場合は感胃に罹り易いのである

▲入浴後守る可き注意 小兒を毎日／＼風呂に入る習慣の家庭もあるが身體の清潔を保つて遣る爲めなら其様な必要はない吾輩の家では子供の入浴は一週二回とし腰巻は入浴の都度即ち一週二回洗濯したのと取替へ襦袢は一週一回同じ洗濯したのと同じ着替へさせて居るが之れで立派に清潔も保もたれ健康も保もたれて居る未だ襦袢を用ゐて居る時々股間腰部などを汚くする時代でも湯に入れた軟い布片類で丁寧に拭つて遣り湿氣を悉皆と取つて置けば必ずしも毎日／＼湯に入らず共よろしい入浴後は俄かに體熱が蒸發するのであるから動もすれば感胃に罹り易い小兒の爲には寝る前に入浴させるのが一番安全であるが若しその他に入浴させた場合は綿入れの一枚位餘計に着せて置かぬと好けない小兒を銭湯へ連れて行く家庭に於ては浴後歸宅迄の間に充分なる注意を拂ひ自身の温か

さに取り紛れて小兒に薄着をさせたり風に當てたりしてはならないし又何れの場合を問はず湯を使はせた時は湿氣を悉皆と拭き取ることを忘れてはならぬ

## 母親への戒め

白山生

子を育て、こそ知れ親の恩と誰れも云ふて居る通り一人一人育てる苦心と云ふものは並大抵のことではない。それもまんまと首尾よく育て上げた人はやれ／＼と重荷を下ろして扱て是からは樂隱居と極め込むことも出来ませうけれど夫れが一つ遣りそこなつて飛んでもない出来損ひを造り上げる様なはめになつては其苦しさつらさは然こそと思はれる。世の親たる人は戒めに戒めて百年の悔を遺さぬ様心掛けねばならぬことである。次に記すのは或悪書生の母親なる人の懺悔話、座ろに御氣の毒に堪えぬところもあるが考へれば強ち豫防の出来

ないことでもないと思ふ。見る人如何な感ぜらるゝにや  
 世間へ面目がありませんから夫れ以來一度も外出  
 は致しません、良人から叱られる迄もなく無論私  
 の不行届からでムいますから決して彼兒が悪いの  
 でなく私が悪い爲だと思つて居ます、兎角始めて  
 の子で今年十八になる迄可愛いと思ふ計りで  
 只今でも何となく警察署のお眼違ひではなにか杯  
 といふやうな愚痴な考へが浮びますのが第一私の  
 心が宜しくないと思つて居ますけれど、扨、  
 怎しても其麼やうな心が除けません、妙なお話を致  
 しますが彼兒は三ツ四ツの頃から人並外れた伶俐  
 な性でして人様も不思議な程にお思ひになる事が度  
 度ありました、と云のが抑々親の誤でムませ  
 う此頃も私の學校に居た當時の先生がお見えにな  
 りまして、「お前に限らず親といふものは兎角我子  
 の得點許りに眼を着けて缺點といふものは一つも  
 知らぬ」と仰有いましたが成る程今から考へます  
 と彼兒の伶俐な所、他所のお子さんよりも早く智  
 惠のつく事や、物覺へのよい事許りが眼に着いて

あの無法な亂暴な大膽な所杯は寧ろ良人迄が悦ん  
 で助長致させた位でムいます、是が第一の誤りで  
 して、恰ど彼兒が十四の時に大病ひを致しました  
 が、其時に一層彼兒が我儘が嵩んで來まして、思  
 ひ立つた事は必ず決行せんければ許かないやうに  
 成たものですから、私も大變心配致しまして病中  
 だけは成るべく云ふやうに致して置きました、  
 其多病氣が治つてからでも習慣で我儘を徹さうと  
 する氣味が見えますので、それから以後は嚴しく  
 之を矯めやうと致しました、それが第二の誤りで、  
 矯めやうとして施しました私の手段は却つて彼兒  
 に猜疑根性を起させるやうに成て、それが原因で  
 彼兒恐ろしい悪事をするやうになつたのでムいま  
 す、何にしても相當の家の兒の母として最もお耻  
 しい次第でムいますから今度の弟を立派に成長さ  
 せて此耻を雪がうと思つて居ります云々  
 病氣の爲めに子供を悪くしたと云ふことは然もあ  
 らんと思はれるたとひ積極的に之を悪くしない迄  
 も折角賤けた日頃の良習慣を一朝にして破つて  
 しまふことは吾等の日常經驗する所である。之を

思ふと病児の看護と云ふことは中々容易のことではない。一方に病氣其もの、看護をすると共に一方には後來の教育上發達上に害を残さない様になければならぬ、病氣の看護をすると共に教育上の善後策をも講じなければならぬ。是は舊臘のことであるが次の様な記事が報知新聞紙上に現れた。子供の病氣が子供を悪くし易いものであると云ふ例には恰好のものであらうと思ふから次に記して見やう

讀者は十一日夕刊にて『悪少年の放火』と題したる一項を讀みたるならん此放火少年義雄を伴ひて堀留分署へ自首し出でたる其親大澤松五郎の心こそ察するに餘りあれ此父松五郎には妻つね(三十一)との間に長女しげ(四)長男義雄(五)を頭に四人の子供あり夫婦とも一眼にて按摩を業として辛くも糊口し居るが二人とも實直者として客の信用もあり又義雄は不良少年の常なる繼しき親の間に育るとは異なるに如何にして斯の如き毒血を其全身に漲らするに至りたるかと探り見るに彼は三歳の時腸を患ひ醫師は全癒する迄食せしむべからずと命じた

るが子供の事とて盗みても食ひ度く其都度親よりは厳しく叱責せらるゝより遂には父母の不在に乗じて燃ゆるが如き食欲を充たし居たるが父母は飽く迄全治させ度さに強ひて心を鬼にし漸く全快を見るに至れり而も今にして留へばこれが頑是無き義雄の心に抜くべからざる汚點の印せられたる初めにして是より後彼は自分には人が物を秘すものと思へ僻みて他家より物を貰へば摘食する癖付きたり七歳にして小學に入りしが教育の力も彼が悪性を矯むるを得ぬのみか却て年と共に増長して學校よりの歸途には縁日へ廻りて玩具等を盗み來る事を始め茲に彼が罪惡史は一展開せり八歳九歳となるに從つて益々甚しく親も義雄には氣を許さず財布等は肌身を離ざりしが義雄は熟眠中に乗じて枕探しをやり盗み出したる金を持ちて深更をも恐れず家を飛出す大膽さ天晴れ惡黨の卵とは見られたり其よりは外泊の趣味を覺え魚河岸邊を流浪せる乞食の群に入りて共に惡事を働き巡査に迫はれて彼方の擔下此方の堂に夜を明し窮屈なる親許の生活に引更へて自由放縱なる野天生活の樂しさが

忘れられず屢々家を外に歩き廻り居りしが昨年大  
 晦日の夜父が按摩の書出しをなし居るを見一眼の  
 父の心付ぬに乘じ後方より覗き込込て其金高と家名  
 とを覚え置き先へ廻つて得意客より八十銭を受取  
 り其れを着服して家を飛出したる程の大膽さと智  
 慧が付き來り元日の夜附近の軒下に臥し居たるを  
 隣人に認められ宅に伴ひ來れるが又もや二日家出  
 し深川不動へ赴き遊べる子供を捉へて活動寫眞を  
 見せてやるからと言葉巧みに誘ひて公園の物林し  
 き處へ伴ひ行き懷中せし十三銭を墓口と共に奪ひ  
 て一目散に逃出し其よりは歸宅せず所々を彷徨せ  
 しが遂に十日既報の如く西河岸の富永辰藏方へ放  
 火し事の紛れに盗みを働かんとする迄に至りしが  
 子供の事として同家の雇人が同人を伴れて父の父の  
 許へ赴きありし次第を語りしに松五郎は餘りの事  
 に言葉も出て泣いて罪を謝したるが是迄義雄の  
 惡所爲より姉しげは學校へ行きても何かと云へば  
 友達より泥坊の兄弟と罵られて肩身も狭く親とて  
 も忤の不所存より客の信用にも拘はる事多く義雄  
 一人の爲に一家は世間に顔出しもならず忙しき日

を送り居たにも又もや放火の大罪を犯せし事を聞  
 きたる親心の切なさ情無さ、我身は何となるとも  
 儘なれど可愛い子供の行末が恐ろしく又懸念さに  
 涙を揮つて最愛の子を警察に伴ひ行きしなりとは  
 彼等が親心思ひ遣られて憐れは深し

# 德育の開発につきて

光藤夫人

野蠻時代と子供時代とよく似通うて居る事は今更  
 申述べる必要もない様で御座います但し子供は  
 野蠻時代を表現するものというてもよろしい。身  
 體の大きな力の強い方が何でも勝つ。何か言合を  
 しても争をしても、すぐ腕力に訴へる。幼少年も  
 のが泣いて助けを母なり其の外の人に求めるのは  
 野蠻時代の弱きものが強者に打負かされて他の  
 強きものに助けを求むると一般實に相似通ふ點が  
 ちぢるしい。だから子供は餘り細密にキビ／＼と  
 干渉するはいけませぬが、又餘りに放任主義でも